



重修真書太閤記

七編
四

13
459
64



13 15
門 5
459
卷 64

消
通
流

重修真書太閤記七編卷之十

筒井順慶裏切の事

并柴田齋藤伏勢の事

爰に稲須万五郎叔山主水兩人の互ふ猛虎飛龍の
勢とて一時の睨こあふくあうけるが双方息合
と計りやと聲とけく切結ぶ三尺七寸の大太刀
と三尺余りの大薙刀と合ていらあれるかまてい
一進一退を電光石火とてくひまもあつばらそ
うの勢のさなり叔山もくせよあくるな主水とい

同
會
攻
印

大月己二編卷十

さむしむば杵山いやくかと得踏込く薙立る万五
郎い今日とゆざりと元より必死と覺悟の上とい
いふゆゆの只一人續く味方の頼なく心細く見
えなうらう血み深ゆを打ふりく進いけるい
ゆふうーげん杵山が横よりらる薙刀とうげ損ト
草摺のそま間より鋒ふりくささうみ切川け
ま心いさびら猛くとも痛手なれい膝と折そのま
ま横より打ふると主氷より寄見事なる稲須万五
郎討もうらうらも前世後生の因果より敵となう
味方とさうらうらも宿世の輪廻とたのひ知バ何を
かよろこび何とうゆあーまんと聲とうくまバ成

五郎莞尔と打笑そのま息い絶てげり注水をふ
らら首と擊鎧物具太刀刀をな取をくくを捕とさ
まども主水も重手と負身体不自由なるけさハ攝
州有馬へ湯治のさめふ趣けり然るに万五郎が弟
稲須壹岐守あかしく手疵療治のためあれも有馬
へあち合て互に顔と見合をゆり遂に知人となり
て後壹岐守申げり我兄万五郎い近頃世に勝と
侍よてゆひををを打とあふよて御邊の
武勇い知まいたるその時兄が最期よて持てゆ
三尺七寸の藤四郎吉光をれい我等が家重代御邊
の御手よ入てゆゆ近頃さうなる御無心あれど

大問已二編卷一

二

も御返一被下ゆらせ世にあらん兄の形見と見あり又
父や祖父のあゆめいと末代うけて調寶に備申度
ゆと申けし主水熟間をりいりいりも御所望し
まうを返一可申はてゆとて即日使と京都への
をを刀と取寄壹岐守あを渡しける
稻須壹岐守の後有馬玄蕃頭入仕ふといひり
杵山木村と中たぐみて前田利家入仕へけるが
木村う方う構けるまう天正十八年小田原
征伐のため秀吉公下向ありて三嶋入宿らるる
ふ処へ参上しと訴へりいりいり石尾長兵衛を奏
者まて事の始末と聞食何方へ奉公とるともく

あしうらうらとの御意とりまひり前田の家入仕
へけるが後入加藤主計頭入奉公朝鮮へ
たり手柄をあうそそのち宇土の城攻の時
主水下知し一日の間入城の大手際へ竹束を
はけりるを清正あう感稱一家老物頭の内手
柄ののの廿四人のその中へさし加へりこなり
然るに故ありて加藤の家を立の唐津あり
寺澤志摩守入仕へり杵山内匠と改めりなり
その子諸左衛門入肥後國みのこり居たりし
あし唐津へ來りて寺澤家入つりふのちあひ
筑前の黒田長政の招きふり筑前入來る長政

卒去の後忠之は仕諸士頭として江戸御殿主御
造營の奉行として勲功を立恩賞とありて時服羽
織白銀とあり忠之も所領の地加へらと
しちり鳴原の亂より忠之は從ふて出陣しける
か二月廿一日の夜城中より夜討に討て出し時
諸左衛門一番より合を太刀打し疵をうけ
たり長子文大夫甥の松山權大夫并み家來一人
討死に同く廿七八日城乗の時先日疵を
めのめどとせし真先うけてふとてひ手を負
しちり忠之當座の褒義として白銀を賜ひ歸陣
のち加恩あり子孫筑前ふありと云り

爰に大和國郡山の城主筒井順慶入道ハ明智と無
二の知音ありしとも家老の松倉鳴の兩人主人
をいさめて出陣させられたるその人数むりや八
幡の洞ヶ峠より出山崎の軍の注進と待ける
天王山を松田太郎左衛門討死し山崎を伊勢
與三郎討と羽柴方次第に勝利と見ゆる由と斥候
のめのめり擲の齒と引り如く會圖をなすりや
松倉鳴と兩大將とて洞ヶ峠を下りて八幡の山
下小陣とて郡山へ早馬と立てし順慶の出馬と
申さるべ順慶累代相傳の旗とて金の分銅の
大馬印とありたて黒糸の鏡と金作正宗の太刀と

帶梅むちの四半を以て諸手の合印となり一万余
騎と三手より一番小田切宮内少輔春次小泉四
郎左衛門秀元森縫殿助二番飯田三郎四郎直宗
井戸十郎國次三番小松倉小三郎勝重播原六右衛
門ふれらを宗徒の侍として明智日向守光秀が本
陣として切てあつる明智方あてもめ終るあり筒
井の心を疑ひしうに齋藤大八郎利次柴田源左衛
門堤の陰に埋伏しつと筒井の勢をやり過し二
陣三陣の間とあつるさ処へ鉄炮を打つげ畑の下
より鎗と入右へ突立左へ切りけあめささげんで
駈ちらしけまは小田切小泉森が三千餘騎立あ

もろく切あけ散々崩さるるされ共筒井の大勢
なり飯田井戸心得たりといふまゝに関を作つて
切めまは齋藤柴田聲々に武士道しらぬ犬さふ
らひ討て日頃の遺恨をさるる續けくと下知しつ
いむげし軍ふ大和武士若干とて敗軍に齋
藤柴田のあひのまらにうちつとあむし芝居
ふ居並て息つぎ居たるうららるる松倉嶋が陣よ
り勝りにさるるて三千餘騎朝のさつるが如くお
しめをたり柴田齋藤らあめり幾度となさ掛合
ふ二ヶ處三ヶ處薄手重手負ぬめのもなめりける
処へ荒手の大勢ふをたまはのくしやといふま

まに直ふ打立戦へど實ハ疲し一勢なれば手の下
三四十騎ハ討きたり齋藤柴田グ身とても鉄石
みあはざれハ左右より息を引く飯田と井
戸といひねてより柴田とてんと七百餘騎一ま
をもせはせめ付たり柴田も今ハあま追なり切死
に死なむとおのひ定め飯田と井戸を左右よりけ
静う馬と歩をさう齋藤らるめよあまと見はけ
柴田とてせめめかると鞭ふ鎧を合せて寄近つ
る鋒より火を出してぞ戦ふさう柴田ハ聞ふる鎧
の名人なり真先またちて手の下ふ七八人を突ふ
を扇開さそうち遣ひ事もなげよ見え一處へ誰射

けん流矢ひとりの飛來り柴田肩へらつとたつ
痛手なれば鎧とをて太刀と抜井戸を目よりけ切
て入井戸が傍よりけり真壁與九郎長刀を以て
を縁うけむの進をけると見てあはらうの大
和侍うふ其方如この長刀よりけらる柴田あ
罪ほくるといひあめ一とも戰場あれば為方なり
西へむの念佛申せといふやうに真壁り馬手の
腕とた一打は打あこは真壁ハ手を負たよりく
處と切ふをて首とくんとする處へ敵二人鎧と
て左右より突うるを源左衛門ハ見向もを右
に拂ひ左右切倒し猶も進きて働さける井戸十郎

たつと見て天晴勇士や万夫不當といふれなんめ
うたれを討んぬ情ありいりよもして落さむゆと
あめひいれども柴田更引づくもなり大勢も取
あめらむとて危きその處へ源左衛門が嫡子忠
藏たをけ來まばあうりこころ即從七八人あり
合て源左衛門よかと合を源左衛門もくたけり
狂めて切まはまば井戸が勢散々切あひけらむ
柴田父子主從一所なりて息繼居たり齋藤大八
郎飯田が勢の中へ切て入むるを幸よ切をて
あむとて命とうさう狂ひまはまば飯田が手の
者四方へむつと打ちさされ結句あさういひろく

と切開られて敵もなり齋藤あまうみ川うとさう
花々し軍とあさう命を捨て誰までもうち
もせて我等が首をとれゆと呼らうてゆくと打
笑ふ筒井が手の多けむと柴田齋藤も切立ら
と本陣さし引退く順慶あさとみ敵いたと二
人あり猛しとも何れどのさうあらん大勢の中へ
ひさ川と討て取とそ下知しける筒井が旗本
り松倉小三郎勝重米配と取て荒手ととめけむ
と榎原六右衛門真先小駈ぬけ齋藤柴田と目みか
げと鎗とつけけり大八郎利次あれを見て悪
榎原六右衛門汝と討て死手三途の道しるべとせ

んとりふすゝに好むところの四尺八寸谷山鍛冶の
 鍛へたる大太刀うちあう當を幸切てまをれバ
 或いけさうけ腰車真向なりさうあて打敵をバ
 多く打たせど我即等も皆うこま今いそや乳母夫
 の中西茂大夫只一人手負さうも續きたりける
 がやあ殿何とて左様狂ひあふを柴田殿もをて
 に討せあひぬ今いさうとあを見えひといへば大
 八郎いさうも言たりさうい敵の氣色を見よとい
 へば茂大夫のび上り見よさうい處を一打し首うち
 落しその首を手提て立しけり
 鳴龍近齋藤大八郎を討事

并光秀粽を取食ふ事
 齋藤大八郎初次の乳母夫中西茂大夫を敵の手で
 かけとてあれさうあその首を提けて半町さう
 立しあふれいさうあし大和勢り明智方の
 首を取て實檢のさめ旗本一向ふと見をる謀なり
 首尾さう旗本近づさあバ順慶法印み飛りさう
 指違へんめのをと八方眼をさうて進そゆく
 と筒井が先手の侍大將鳴龍近らうに見付あを
 へ正しく齋藤大八郎何とて大和勢のそのうちを
 あのみ行わらんこれい必定大將近州を事と
 なるを計畧とあをえさう明智方さく此兄弟を

夏ものことと草いご参らふとおぐと打持たる首を
投付る尤近の長刀取直し首をとること拂ひとをえ
や近々と誥もをたり大八郎の太刀を打ありく
拂切よと差あるを尤近のゆくあれを知手元近
くるとあつて必を組んと計るなるん組て勝負の
あやうしとおのひ定めしこなれはた長刀をと
うのべく打て開てうけんとおし又のゆけう
して一あぶめと千變万化秘術をつくくたか
ふあつと大八郎が打太刀筋次第くみみごこと
ら尤近得たりと踏込くうけくさばあやうさ大
八郎が右の腕をさくめ又打うごして少しひる

む處を付入て遂よらまを難たとおさへく首と
めをせけり嗚呼いごすや大八郎生年廿五歳器
量といひ武藝と云多々世よありあつ侍と敵も
味方もあつあへく感をぬのめあつりけし齋
藤柴田うち死して伏勢いづも散々なうつと
ハ筒井を支えんとさうめのみなく追川あく打めと
み淀川よるせ付嶋松倉と使として只今打取し明
智方の侍大将齋藤大八郎柴田源左衛門が首み雜
兵の首六百餘と筑前守の本陣へつらるし合戦の
證よとあつていごをけし筑前守のあれを聞嶋松倉
と呼ちうけり頃慶法印病氣全快いごさ出陣の

六月廿二編卷十

よし愛度いその上合戦の次弟承るうさげてい
 猶以てろしう廻り油断なくめをがまひべし鳴松
 倉二人のろしうさげ羣あひ逆臣退治の上ハ一廉
 褒義申沙汰をへしとて兩人つゝ金銀多く賜るう
 てけりあをれ此二人なりうりをい順慶法印悪逆與
 カの汚名をとるその身を亡ぶしその家とたぬを
 べさにあしころも鳴松倉胸間へ春日大明神をけ
 入あふく筒井の家と立しそのろしうに大和國を安
 堵しけることの不思議ふといへばめさへよのめ
 尤もあらしに洞う峠日と過し山崎の軍を見物し
 堀尾と堀が松田を討て天王山と取切中川兄弟が

伊勢與三郎を討たりと聞やいか八幡の山下へお
 ありあり明智小向て軍仕つるの運を両端よりけ
 しちうされい京童が口くを日と和この筒井どの
 といひし詞をおろしといふもありとあもか
 くあも家老ろど大事のめいよにありと家老ハ
 國の柱石とたとへしともありとや然も明智方
 の口々多く破きて其手の大将たち取々をかくし
 く振舞て討死しる中に山崎の先陣齋藤内藏助
 利三次男奥田宮内允景弘三男齋藤伊豆守利光ふ
 らびふ明智十郎左衛門光近ハ諸軍ふ先たり士卒
 といさめ一足もひくたぬをうめ今日の軍ふ切勝ハ

天下ハ我等ガ天下ナラフ日本國ヲ知行シテ榮花ニ
あこるるもめやうもめやくと采配のちさる計
鞍うさふけい立あぐりて下知とれと萌とらる
一 大軍なれば耳も更み聞入を村々らつと亂と
あひ取志のむづくも見えさうける然るふ明智日
向守光秀の旗本あてい稻次万五郎をののみみ出
一 ありともいまご歸り來らぬ定めと山崎の軍味
方勝利ありとあひ居たる処ふ近隣の神人
社司僧侶いのみふ及ぶる醫師陰陽師巫女山伏茶
人連歌師とらめ用達の町人などいづれも陣見
舞と稱し酒肴とのせせて參上をり中あも烏丸二

茶下町住と一饅頭や塩瀬三右衛門といふわ
の明智が用達よてあうけははあれもおかしく下
向して明智が傍ぢりく伺候し時宜の挨拶して居
たりける折ふし光秀あこるる道喜が粽をと
うてそのまゝあれと喰ひてけり三右衛門あれと
みくあわふし粽の葉とも喰ふと將軍の作法
ふやいやく尤もい有まど山崎表の関の聲胸み徹
して葉をむくこととせしあうめめどの心よて
天下と静めんと覺束なりとと合をて筑前守と
いふ大器量の西國を埒明て切上ると定めて
勢ハ雲霞のどくちなるらめいさや筑前守との御

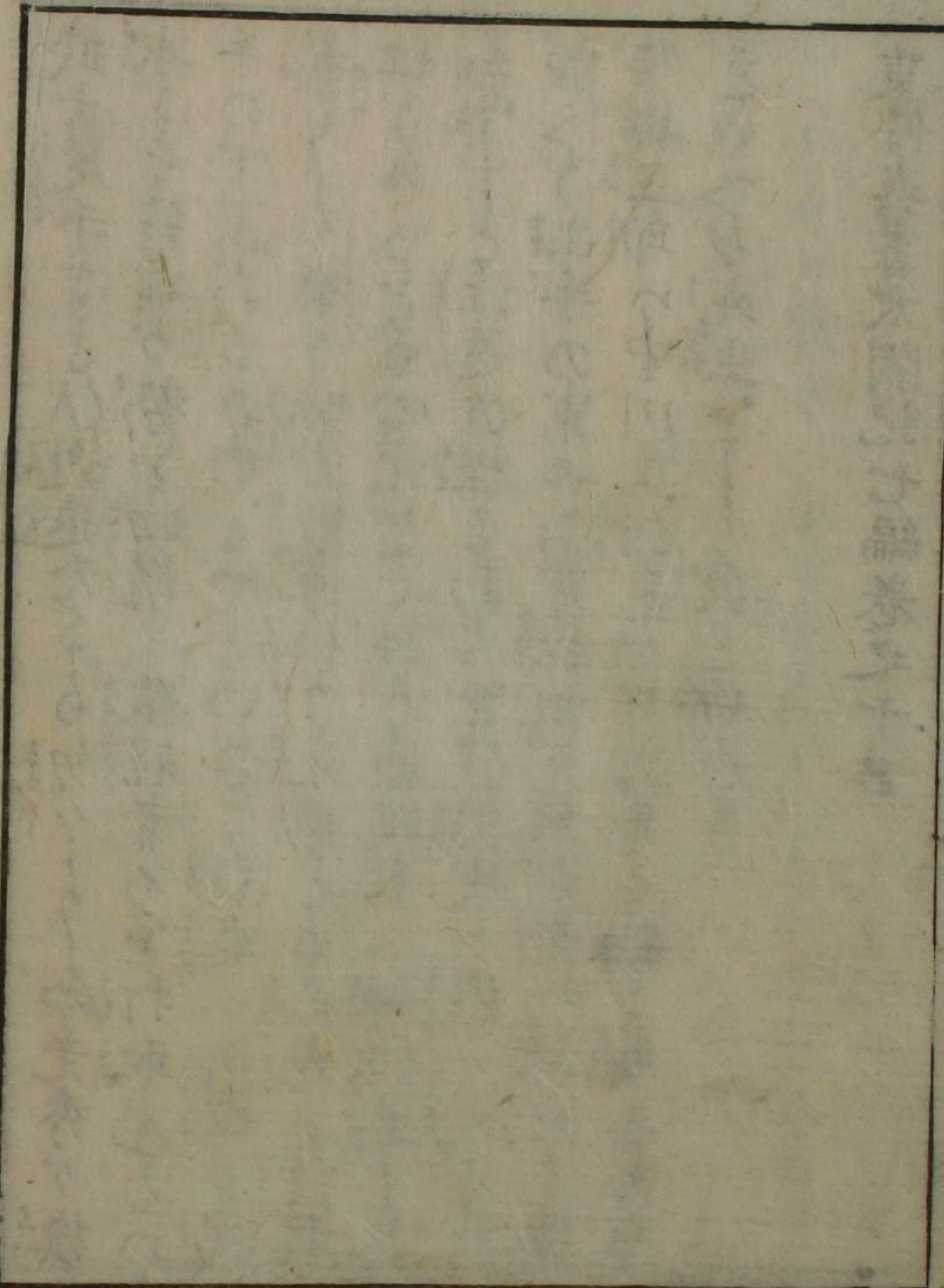
六月二十一日

三

本陣へ参向し御禮申さすていありありあん同心
あへ方々と懇意知音とさそひあをを明智の會
釋もせぬ我先ふとを下の塩瀬一人が心よつと
今よそ集まりし出家山伏社司神人何とつと見
とめいなむいごと大勢を引たてらば一度よつと前
に立あるいとありさあとい踏たとされぬの
さそぐりし見えてけり明智が外様の侍とも本陣
に何との出来し心元なり定めて謀叛人よてや
あらんぞらんと互ふ心を置合をのちくが勢をよ
とめ引かく立退り旗本の勢の次第よとさたりけ
光秀も心中より驚きさちぐらへらぬ体よと臆病

武士足手やとひ逃退たるも勿々し光秀が旗
本よそ筑前が勢と切崩し猿冠者めを打取んとい
手の下みあるものどやといさこ立處へ御牧が使
者より來り味方敗軍仕り兄弟とも必死と防戦
仕りゆへど心元なくゆるぬ坂本へ御引返しあ
るべしと注進の程もあつと稲次が籠一人を
あへり山手の軍ゆふと松田太郎左衛門討死し伊
勢與三郎の中川よ討とい万五郎も敵よ取あめら
といへど死生とつとにと申けり

重修真書太閤記七編卷之十終



重修真書太閤記七編卷之十一

明智從臣討死と諫る事

并秦桐若勇戦の事

天下順ふ飯を多ゆ山崎の一戦なり天下逆ふ飯を
 るや山崎の一戦なり順と云も至順とあはれ逆と
 いふも至逆とあはれ順逆とも又似て非なるもの
 あることどもあまを明らむる鑑ありあれを察らざる
 識なく英雄一箇の心智を以て四海万姓を弄ぶこと
 ともく天の意あるやいふ人智の然らむる處り
 明智日向守光秀よく總見院右府よりちて羽柴銃

前守あつたを能く其の智のたゞざる故ら
其運の然らしむる處に凡慮を以てあれを知
あつたは光秀の坂本安土澤山に兵を置て根城を
固くし尾濃北越ふ備あるに智慮たゞざるとい
ふべからず軍に必山崎しして天王山を取と棄ふ
こと以て戦の機をくうると筑前守と一轍をどと
をその遲速は就て勝敗の兆をのづから顯たり
光秀御牧が使者の口狀と稻次が籠の注進を聞て
掌中の天下忽ち他の有とからんことを悟り今ん
や我討死とべし時節到來をう續けぬのともとい
ひて既馬ふうち乘馳出んとすけるを見て

比田帶刀則宗急光秀が馬の銜み取はさぬは
づへ出さざるありや短慮功とあらばと申は故
人の戒やう敵をて天王山をぬる處々の口々を
破り味方の物主多く討と士卒はうれく戦ふべき
様なりかまぐひは打出ぬとも亂軍のうちみお
しへざるは名もなると下臆み窘められぬん
近頃以て勿体なりのを勝龍寺へ却入ありて軍
勢の氣をやしむひ夜ふ終とて坂本へ却越ある
くひさてのち又謀畧をととのへ此表をて敗軍あ
りける恥を雪さ終り天下を定めさせぬやと涙
と流してうきとさける處へ進士作左衛門貞連

溝尾勝兵衛茂朝のうさよ手ひくく戦ひしと見え
て太刀打折鎧まがり兜の前立もななく指めの散
散と切れま全身朱みなりてとせ来り光秀が前
あしこまう今日の軍うさうり拙く負へしとい存
知もろらばゆひつるう堀尾茂助堀久太郎が天王山
の上より打おろし鉄炮と射立らまおのひの外
に切すけてひたし軍の今日ふりさるべうらば
のそら坂本へ御入ひへしそのち所々へさけさ
う軍勢を呼あめめ大津相坂の道を切あささ京
都の運漕ととめ時とてい醍醐山科の邊へ切
て出まさい四明のたげうら打おろし白河岡崎の

在家と焼立ゆいそ終ら切勝御運を開くとあふ
とと諫めしうども光秀更まさ入るゆとよ
面々の計策よとにしうらさく覺えぬさうなるら
光秀さし鬼神の如き右大臣殿をたご一時ふ打
奉り勅定よらうて將軍の号をゆるされ天下万民
の苦患ととくひ四海の太平とゆいさん
さよさげんとて猿冠者めが切上るとあをさうの
ふさのの多く討せしと全く戦の罪とあはれ天道
光秀とよくこあふが故とあふえさう然バ只今こ
の戦場へ打て出めしと共と討死し光秀が為し
忠戦ありし松田伊勢御牧稻次等の亡魂をいりさ

めめろともは死手の山とあえ三途の川とこら
らぬとおめひ極めてゆへむをこのさあくと云ま
まら馬ふ輪をうけ打出んとする處へ百三四十騎バ
あうと引率して間近く来るめあり誰なるらん
と見うへまば柴田源左衛門光方嫡子忠藏勝之也
あまのいりうまと眼ととどめ能々見まば源左衛門
父子重手痛手数ヶ處あうけ流うく血あるま白糸の
鎧のいりうまの緋あどしに色うへたり草摺のこら
まらまのめこの押付ま切破らまてちましくみ見
あまらまのめこの押付ま切破らまてちましくみ見
如く筒井めら裏切を嚙止まゆと存知ゆて齋藤大

八郎と共ふるを向ひあめふらど切破うてゆへど
も味方の小勢なり敵の大勢終ふ二人の別々に軍
して雑人原多く切殺しひひしが目まに敵まめあ
ひもせは犬死せんもくあしと打あぶらうあま
追引て参りゆゆ坂本へ御入ゆや爰まで合
戦その詮まら齋藤の定めて筒井が旗本と心ま
一切入てゆへら千ふ一川も生て帰るべしとハ存
まら齋藤討まゆへら順慶法師が手の者定めて
あまら寄ゆべし急ぐをまへと懇ま勸まは光秀
雙眼ふ涙まらゆべ誰が為ま父子とも左様の深手
まおの川まらまみか光秀が為なるまや人をまらど

み苦しめてあまを報ゆる力なりといざらば快
く打死一面々と共々劍山刀樹のめと圓居して
憂世の中とあつらうと聞らる柴田聲
あらくらう何とて左様よ口惜さを仰らるる
や某大八郎と引こく多くの敵を切中ありて
すて参り事いりあてて殿と坂本へ入る
せ後日の軍とをくらんが為りていれめと殿今打
出あふて亂軍のうちよ打とむひあべ天下と静謐
せしめよとの勅定あもそむる徒に逆臣の名と流
しむらんといらるるゆくりをくいとあまひ
らなげさ様々諫めつとバ光秀も道理は折てい

あまも百々の志のあどめざらざりけし
坂本へ落行すと云の馬の手綱を取さむけ
柴田父子大ふらうこひ爰に寄くる道は
和武士と切らら跡らう追付申すとあが
血しをとおのどひ勇にぬいさんで待りけ
比田帯刀溝尾勝兵衛進士作左衛門の光秀を守護
して勝龍寺の方へ引退く山崎表りて中川頼兵
衛兄弟池田勝三郎入道高山塩川安部以下の
相應ふ勝軍いせしめられども今曉らるる数刻の合戦
なりいづともく身体疲れて息合をさくくあ
い芝居に座とめて兵糧やあひ氣とのなる筑

八月二十一日編末

二

前守さもあらんとおのひしうら黒田蜂須賀藤堂
 青木増田小西の輩と旗本らう擇出し山崎表へさ
 向らる明智方北方の大將明智十郎左衛門村上
 和泉守奥田宮内諏訪飛騨守山本仙入あど敗卒と
 いさめて七八度ぐらどい掛しう共御牧三左衛門
 兼形父子兄弟中川が手は打死しこのち此手の軍
 いさく敗れたり又右備の藤田傳吾行政の明智ふ
 ふうく頼まれて今日も此手の軍目付なりけるが
 崩る味方よ引立ちらとあめを五六段引退しう
 あまの我身の恥なりとて只一騎引返しおのふや
 ぞ戦ひ重手数ヶ処負しう心なりぬるも引退くと

の外藤田藤藏同傳兵衛奥田市助溝尾五右衛門進
 士作之丞磯野彈正鳥山主殿助松本主膳櫻井五右
 衛門逸見左助堀尾三之丞以下宗徒の物ども踏止
 ころて能戦へる寄手もめとぐりてあましとど見
 えたりけり然る黒田官兵衛の家の子は秦の桐
 若とて力八拾人又敵をる壯士あり十團子の指物
 の長さ九尺むりりなるをさしけし黒田が家の
 十團子とせし聞えさう藤田藤藏同傳兵衛らした
 なく桐若も落合互よめ敵と見てけし右左ふ
 切りけり上段下段秘術を盡し戦ひし藤田
 今朝らうの軍も疲となり桐若の荒手なり遂に

部之助一足も引ば亂軍のうちよ打死しけり
と見て妻木忠左衛門伯々下部權頭酒井孫左衛
門同與大夫以下段々と討死しけるふり
の兵士ともいひつゝとて死と見ると誠
に歸るといふ詞あるも似たり頃水無
月十三日南風をこりけり吹出し土烟あび
たり起りし方もあつて明智方とてい
てとむつゝ方もあつて突合ひ
ふりどる敵味方のあひるも見えけり
と幸ふ切とて薙たて走り廻ると云ども
の勢の潮のみあつて如く次第くふむぐ
筑前守

風上りし驛向ふが故に川も切も大い便を得た
明智日向守光秀の勝龍寺をめぐりて落し
ふりし本道より敵をたうとて田中の徑を
傳ひ退けるもあも危あ見えたりけり光秀
従ふの爰より引残して防箭射けるものと
今いとも進士溝尾開田比田等のりや付従ふ
のものなく辛くして勝龍寺に落付轍魚の息を繼居
たり又明智が本陣あり柴田源左衛門父子あはる
敵のあるあつて支えて日向守を心安く落
さむと打のこされ侍とも一呼あつめ水
色は枯梗の大幕引て猶も日向守があつて
色は枯梗の大幕引て猶も日向守があつて

めてなりし羽柴方の荒手の大勢追手のめて一
手よなうて寄來る中あも蜂谷出羽守真先と進み
あの水色の幕の明智日向守が旗本とさんなれの
ぐとまどともみあめを攻付たり柴田父子へ
元より期したることでいあう静まりめつりて音も
をば蜂谷の氣をゆの大將なりとさ間あうをば鉄
炮うちうけ直と鎗を入んとひしめく所を見をま
しとららの如く打たりたる太刀を打り曲りし
鎗をたらし立明智日向守と脇股耳目と頼まれし
柴田源光衛門同忠藏勝定あうとあうと呼え
う呼り切て出大將とみを組てさ違侍以下

との罪作りまた切ておとせと聲くみ言とバ蜂
屋頼隆くまれしものと走廻るされとも柴田う勢
のしつうり百三十餘騎のつとも二ヶ處三ヶ處手
ら負つ次第くみ討死し今源光衛門父子只二人
めとみを切ぬけうあうと入り合てら丁度うち
丁度うつういめけへぞ縦横十文字み乗破り乗
まけしけるよあう蜂谷う手のめの三百余人はう
たせけりさ共その身金鉄とあうされバ父子一
所みまうとをなうて討死をこの間日向守は
くろめし落のびく恙なく勝龍寺み入しけり又山
崎の先鋒齋藤内藏助の今朝うり數度手を摧つて

戦ひ敵をも多く討取しうども味方の敗軍あつた
心ちうくは崩とうくる味方と共み引けるが急度思
案しけるいめくの如く亂立たる軍なり敵みま
さして筑前守み近付組てさし違へるうさちやくバ
神戸殿とうちささげうとてめめても死ぬる身
なりささしたるふて万一本意をとくることもあ
そのまこと我手のめものまめし合を旗馬印をうな
らうことさし物袖あるしとあめくく小流み足
とひさし戦勞と軍勢うささし休らふ体みめく
なりける處へ只今まて大八郎み付て大和勢と軍
さけるめものさしを來り大八郎殿の順慶の旗本ま

で切入あひけるが鳴龍近み見知し終み討てさせ
あひつと申もあはる立かうう腹うさ切て死しと
けり内藏助あつと聞せはる筑前守の手み入た
あそやいうあもして筑前守みとあめくくともいま
だ旗の手も見えぬあつと見えし赤地又瓜の紋の
旗の臆病めもの三七郎信孝なり手あはたし終と
是も敵のうごたれやをめて是を討取て真途の旅
の土産と見ん打や人々めくまの面々とうち残さ
し五百餘騎只一文字まあし開き五倍子川を前
みあて一枚盾と突並へ三七郎信孝の意もなく
し行横合らうや川鉄炮と打うけたる理なれが神

戸勢軍も勞し味方のめりあがり川邊も下居
足と休むるなりんと心安くおのひ川邊處をねい
とて敵やれのおさむれし口惜やとあてて
ふさめも立さるく多々の中より只一騎黒革の鎧
も兎齋の曾と著白馬よりみ街大太刀抜て真
甲もあて河邊も馬どうけ居て是は三七殿の御内
も尾州の住人門真民部が後野々垣彦之丞なり
そとなる勢の齋藤内藏助大逆無道の光秀が余類
のうとやのとと云ふに川へさんぶと打入た
る齋藤伊豆守あてと見てのぞ野々垣と打取んと
頭なり甲の三枚鞆と脱て投とて鎧の上帯とくま

子も小手と取當も取てとて太刀むりり素膚とたり是
も同く川中へ打入齋藤内藏助が二男齋藤伊豆守利光十
六歳と名乗るゆいなり合てむむと組伊豆の聞ふる
大カやうあぢういめも合ひるが終は水中へ落入てうげも見
えびらめり河邊も立て見物しつるもの多うりゆい
是はいゆある事ゆんともゆめさるるむりやう齋
藤が即等とも具足とて川へ飛入んとなりけるを見て
内藏助あてと製し侍の子の十六歳の男のさうりやう敵一
人を打損とて此後用よさるる面々のさるるさるる嬉し
いことたて置てなりゆいゆいひひと即等共も手
に汗あてて見物に神戸勢の元より野々垣を助けんとせびい

たづな川中をもち詠め浪のさくらと守り居たりけるがやあ
て伊豆守をもち下の瀬より出野々垣首と引提息つと
水中へ落入て味方の陣へをを入けり内藏助是と見て能く仕つと
さうとて組打ち力と氣との合ふものなれば勝負ともよめ
づらゝのびたど水中あその働をあそ手柄なりといふ云々
よぞ賞説もあつと見る人あつと感心し又も父たり子も子た
りたりと聞ぬ人々ゆと敵も味方もあつとあべくあつと今日
の事と
しと陣いゝとととめけり

今按、齋藤伊豆守利光後小籙髪して立本といひ加藤計
頭小後春時啓の兄といふと必り出さる佐渡守利光と
淡心慶安三載八十四歳とて卒とてつと永祿十年の生と
しと天正十年八十六歳なり
重修真書太閤記七編卷之十一終

重修真書太閤記七編卷之十二

齋藤父子戦場と退事

并光秀勝龍寺よ入事

齋藤伊豆守利光十六歳あつと水中小野々垣彦之
丞を討取しと比類あつと武功あつと敵も味方も一
同と感ぜる聲山谷よ響さ合夥しと中神戸勢
むのりの掌中ののめのと取失しと心しと當座の
遺恨やるうとつと物軍一度と川と渡し打て
めくらむのととる處と齋藤内藏助大音あが昔へ
美濃の國主齋藤が一族今へ明智將軍光秀が縁者

山崎表の惣大将たる内藏助利三あふと次男伊
豆守利光へ只今神戸殿の御内野々垣彦之丞と川
中ふ討てひちち口惜とおぼしはる是へ御出の
へ我等が首と進むる殿の御印を賜るる川一
川の軍しを爰等の人の居眠さやういそんと呼え
るあが川と渡しと切掛る神戸勢ハ氣とうむ
どあゆむに左右へ開さ合中を明てを通しける齋
藤父子へ更ニ餘人ふ目とうけられたる三七殿をと
追まはると信孝のものと心と得あへる雑兵の具足
と著替あひとあらくあきとさけあふ正しく父君
の仇なる真先ふ進こむと誰う續うてあるべし

ふめいしくうういりうういりうういりうういり
けし齋藤父子へ三七殿をめとめらび血眼まちう
てころつと廻り向ふめのをバ切て落し又突あとし
中又擲んで人つあてようつと軍ふ神戸勢
惣崩よくどれめと見津田左内同喜十郎同
又藏三人一川とあつて内藏助ふ打むう内藏助
ふと見て見て瓜の紋付しめの具ハ織田津田う
ち知れども正しく三七殿の近親うゆそれいこも
あま内藏助が冥途の旅の先またちあふと言こそ
て右左う切めとあつて引とつと拂切大袈裟う
けら打とあふとあつて左内喜三郎ハそのまうに息

大隈言七巻十一

二

絶たり又藏りて引組を片手より引さげ弓杖六
七段ちが付て首筋つひくむなるその間
に伊豆守利光目むく三七殿と見えさめとあ
御珍しき御姿父御の仇と見えのぐりあふり不俱
戴天と云とをバ知しめさぬうと鎧と捨て突め
ふあそよと見てしその處へ津田新内同成藏徳先
とそろえく三七殿を支えんと突出は伊豆守の
を見て邪魔をふめの共といひさす新内ヶ鎧と切
拂ひ成藏が鎧の太刀打と左手は搦んで引寄せバ
引とて成藏馬より下へ真逆さよよ落けるとその
鎧と取直して下突ふころを突たりけは新内立のど

つちの鎧と川くさど鐘よりけとば裏うらばその間
ふ伊豆守集ひ一鎧と以てるぬ上く咽輪のむら
む矢部源藏たをけ來うて伊豆守み組付とあめめ
のめめゆといひちがう鞍の前輪とあし付やが
て首とくさ落は松井新助柘植喜八郎同喜九郎平
手兵七あど相續とて責うけうとも伊豆守一人
み切立ち何ともあてて打をけうこの間三
七殿のめさのちを生のびたり齋藤父子深く
憤ととも詮方なり神戸方よ能武者三百あちり
うさ手負へ五百餘人よ及び一となり齋藤父子

の手に十五六人の討てけう内藏助へ伊豆守をよ
び近づけけいり手負さうしと問バ伊豆守い
や薄手も負申さバ父ふいりうと問うとをい我
等の数度の戦場を経て軍にたつればいり手
と負しとたうその方の初軍たう多くの敵を討つ
まばいりうとあめひしとたう我ふいり手
増たりと稱羨して父子一所ふ休息しけるが内藏
助四つうと急度見廻し三七郎も逃失てうけも
見えぬその外より敵とあがしこののもなりさう
が一先立のさ如何もしと筑前守も逃付これと
討て恨をめぐとべしとりへを伊豆守氣色とり

父君あめめのみ狂ひあふ今日へ必定戦死して
名と末代は揚べしと仰らしとあはれびめりて
せむへ筑前守の備ふ切入あめめどの軍とい
さうさう討死をべしめりうといへる内藏助あ
短氣也あめめ静めたる羽柴が備ふ切入と大死
とんへ無益たう明智殿へさあくと諫めし詞を聽
入むと終は敗軍にあつて必定戦死あるべしと
の跡は生のところ主人のめりう筑前守と討取て修
羅の恨とりへさんめの我等の外はあうと
いへる伊豆守も得心し然バ立退申べし但父子一
所ふめくさんへ謀のころしとにあらはれと別々

ふつと忍びけき

一書小齋藤伊豆守利光京上り鈴聲山真如堂
極樂寺の塔頭東養坊へ入て薙髪立本と改め
泉州堀と趣さす丹後田邊あゆむ父内藏助
の死骸を盗きてあまを葬りそのち加藤清正
み從て朝鮮み入軍功を顯し寛永三年加藤の
家亡びのち浪人同六年幕府仕へ同七年
從五位下叙し佐渡守利宗と改め御鉄炮與力十人
同心十人の頭となり慶安三年庚寅卒は行年八
十四歳といへり
明智日向守光秀は世に許され軍者として時取日

取の達人とめ天正十年六月二日戌子巳午の時
ハ孤申酉ふあり申酉ハ龜山の方位なり安土ハ寅
卯に當り處の方となる又六月ハ子時を一人當十
の時と云ふて子時ハ龜山を發し又六月二日ハ
先勝日なりされハ光秀先トて勝利を得たり然る
み十三日ハ後勝日天護日といふより天王山
へ松田と後とて向りせしあま却て松田戦死し
て堀尾と堀と勝利を得しハ明智が意策のくらみ
一故とりの然るみ光秀うらうらとて勝龍寺小落來
を城に入んとすけるみ馬はうきて堀を越るこ
と得て北田帶刀進士作之丞あれと助けてやうく

大月二二編卷一

城入しつへ城代三宅藤兵衛綱朝あれと響應一
 狭間を切て鉄炮を配り用心さびしく見えたり
 溝尾庄兵衛村越三十郎以下追々馳集り大く千
 餘騎よりたり山崎より下植野久見を経て勝
 龍寺より廿餘町ふ過びこの勝龍寺の城は今勝龍
 寺村より西ふあさう方四町むりりの處なり
 一書ふ明智とては勝龍寺ふ入らんとせし時白
 髪のお翁の八十むりりなるがをせ來り光秀の
 馬の口を取橋とてさびるときた東の方より
 總角の童子七八歳むりりなるが來りしとてさ
 めの翁大よおそれるこよればけうくるさあの

童子あさうに尋求てやむびとくくく橋の下
 ろり尋出し梅の木の花散々と散々ふらちこり
 ます東とさしてさうさ過ぬとそ八十計の翁
 へ丹波山本の稻荷大明神より七八歳の童子へ
 八幡の御使なりと云

片桐助作高名と筑前守の譲る事
 并中川頼兵衛清秀大言の事

筑前守秀吉ハ山崎表の注進を聞け然ハ本陣を
 移とべしとて我身ハ駕籠のり馬とび先へ幾足
 となく引と駕籠の廻りふハ加藤虎之助清正福嶋

市松正則脇坂甚内安治片桐助作且元槽屋助左衛門大谷小西以下の諸歴々と引率しゆるゆり天玉山のうして山崎の山手川手中筋の戦場を見廻すあふふと敵味方の死骸累々として筭をみざしたる有様目もあてらむと筑前守あれとみくらうつら悦びうのいめかしくあひける然るも明智方の勇士明智十郎左衛門村上和泉守奥田宮内諏訪飛彈守山本仙入五人のめもの度々の戦場と歴するものなれば今日の軍まらびく打合切合しうとも薄手少々負つるのをちるを以て互またとけ合とのとのさしめの袖印をめかがり捨いりふもして

筑前守も近付あはらうへ組てさ違ふべしゆそまもめかしくぬののなるべ五人一所いひけりて馬の足と切拂ひ馬より落る處へうけりて一太刀なり共切たふ此日頃の整懐を関く共ありなまし同心あまや面々とゆいづるも異存なく今我々落人なり即等ども討ててり還らんとする家もな何となるとも心のより更べゆつらなめくさむとあさうと見ると隈もかし山本仙入のひける此多くの死人のその中に入りまじとて倒さるる最究竟のめと家ならんあうらへ筑前守も近付便もようあべとゆいづる

何も手を拍ていゝも計りゝのちまじ實は以て然るべししざらへあひのひくはゆききんといひしどもあめと血はげぐ一鎗長刀と枕と息としづめて音もをばいしやゆくとまのむと案の如く筑前守多くの死骸を見つゝて駕籠のうちまう下知しゆるは加藤虎之助福鳴市松たゝうけむんむめらう多さ死骸の中み陽氣立のなること不審なう又先ふひうせし馬どものゆゑの蹄どめであぐるもあひむべし是は倒れし死人の中みやう死さらぬ重手のめのあるらうん其方ごもの場うごもはたやくめゆうのことと知さるべし

後々の手本なうこと等の中と撰さう味方なうは療治を加へて敵なうの打てをてゝことこのあゆめは沙汰をさる近侍の面々をけしあひのひをよゝぬ御意ある何様さやうの處まで御心のつらあひのさて御油断のなる處承りゆといふありたやく若殿原こゝやうこへ走ちり鎗りて死骸を突うごめしれいゆうふりれい何ごと改めらる山本仙入真先よさぐりいごされ是非なく立上る鎗を取て突うぐるを脇坂甚内をさううるをな曲者どのうとまぐと太刀をぬのて切むとびゆるが山本へ心やゆめくせさけげん傍の死骸よつま

ひきこけりしる處を安治得たりと踏こころて手の
下は切あせゆき首とうち落と奥田宮内ハゆき
と見るよりまらりあしたる長刀と取手もとちゆき
以て開けしめけむらふを平野權平うらうらう大
袈裟ぐげよ切たきハ宮内心得ありめける處をた
たこめけ終よふれを切倒と權平首と取んとめけ
ゆると宮内臥ちたたり一あさあと難けるを權
平さ知たりと飛上り落さまり宮内グ首と取てけ
て諏訪飛驒守ハゆると隔てりあしたれば見あ
るされて討とんとゆるめ飛めりて運よまらうせ
むらと筑前守の駕籠とめりうけ掛ゆると福嶋市

松らも寄何ののちまハ我君よ進と進付不敵のふ
るもひ龍ハさせとと大手とひろげと組んとハ飛
驒守ハゆれを見て筑前守の郎等うさまらげとる
ちるといひながり大身の鎧と打あけ突ゆるハ突
るがー駕籠よ進付んとちりけるを福嶋ゆるりて
推参ある癡者うふその方如る下臈の身とて筑
前どのの目みゆきこの不思議さよ名のむくと
をめしうハ諏訪飛驒守あまを聞とがめ侍の品を
見知ぬその方みゆる無益よ似たれどもゆくと
らそれと知のしゆ是ハ足利將軍よ進習とて五
位よ叙したる侍よ我首とてそのうちよ具足よ

付し金物の紋を知る人らも人ふたづのく名
をもしと汝ふあめて名乗るべし名とべのこぬと
大音ふ叫びて突くを正則をうさびけけ入
て無手とくめい飛驒守ふとこひく推合め
合四五度ぐりど南ふ北よと捨付るこども飛驒
守年老より正則へ血氣壯よ力いつく終よ飛驒
守を引あきて内甲へ刀と突入首うさおと物具
の紋とみまへ握の葉とあそ付たりけし然實檢よ
入しうべ筑前守より見とめ諏訪飛驒守とおが
ゆるそ最期よ身よ着たる具足をめてことい
あつよあり鎧冑と取そろへ筑前守の前よあけ

筑前守あれと見て根付握の紋信濃の諏訪の家
み用ある所なりこの飛驒守の尊氏將軍より以來
代々京都よ伺候しそ有職のりまれありしゆの
日向守と取こ親しく談らふを聞ゆるが
今日こつよめくまて筑前と討んとするゆさ
しよこれども是れ日向守と助けんとての事ふ
らし鞠よあしよに將軍の御為よ日向守と頼て
右大臣殿と犯こその恩義よ報らんため命を
日向守よ呉つるありし侍よめいよさこや
てけりとその首を側近く引くをてあそつあがめ
て能あそ打たり正則よとて首とバ賜てけり亡魂

さそめ嬉しくらめと余所の袂とぬらけり
村上和泉守の糟屋助左衛門は肩ささを突き今
ころとこね起ちやう糟屋が鎗を小脇よこさみま
うらぶらぶと付入を助左衛門の見ぬらけりあて傍
近く引を鎧の袖を引搦と捻倒さんとすけり
を和泉守心得たりと總身の力を入れて蹴上るを
みよ助左衛門が取たる袖を引ちぎり左と右へど
めらゆゆのふ和泉守は落たる鎗を取らりゆゆ
糟屋と目づけて突く糟屋はこれを生捕よせ
んと討ていひ引てら打種々あいらふを村上
ら手負し獅子の荒らゆゆめぶく付入付入突らどふ

糟屋めとくめてあまうとてふ危く見えうら櫻
井左吉らうり出御免ゆ糟屋どのとゆひなうら
和泉守が押付の板をきこめようゆゆとてた
とろくその處と助左衛門をさまもろく切付て終
に兩人相打よ首と取てけり明智方の殘黨死人よ
あふよとてあしたるを四人まて打されば猶もあ
んと筑前守の近習の衆これゆくと死骸をおく日
けもさ首取て手柄よをむゆと走り散てさぐりけ
とべ明智十郎左衛門も今いあうくくまうゆゆ
しなうらうあうりを見よ筑前守駕籠の戸開悠
悠と四方とあうら意もかけ打とげし姿を見る

より究竟の處なり。盲亀の浮木、優曇花のくまかとの
たとへは是ありん。大事の場と氣と、つめ來國次
の九寸三分柄を、箒の糸とめて、左巻、右巻する。逆
手も取て、矢と射、もつち早く飛、くるる世も
危あ、次第なり。されとも天授の英雄といひ、古も
今もたぬ。高運の筑前守、あれ、ちともさそ
ゆ。此の珍しや、明智十郎、左衛門と聲、うけむ。後
より片桐助、作且、元がゆ、あくり、ありの白羽の鳥
獵、箭十郎、左衛門、が眉間の真正中、くろくと立、バ痛
手、ひり、をこし、もたまらば、仰む、げと、どふと、倒、とけ
り。筑前守、是と見て、助、作り、手柄、なり、くた、ど、秀吉、あ

め、み、処、あ、ま、この首、これ、得、させ、よ、と、駕籠の
うち、あり、國次、の、刀、を、抜、て、十郎、左衛門、が、首、と、打、お、と
し、その、刀、の、鋒、よ、つ、こ、貫、その、の、上、り、大音、聲、あ、と
の、首、と、誰、と、う、見、る、明智、日向、守、り、大將、今、も、明智、十郎、左
衛門、と、死人、の中、に、あ、り、ま、り、と、筑前、守、み、切、て、あ、り、
時、不思議、や、八幡、山、の、う、へ、あり、白羽、の、箭、一、川、飛、來、て、眉、間
み、たち、り、う、へ、秀吉、あ、り、ま、り、こ、處、を、の、ぐ、れ、たり、是、を、正、しく
八幡、宮、の、擁、護、あ、る、べ、面々、あ、と、と、見、る、と、呼、ん、だ、り、中
川、瀨、兵衛、と、こ、も、出、て、目、出、度、い、と、い、ふ、を、聞、て、筑前、守、乗、物
み、の、う、ち、の、う、へ、瀨、兵衛、骨、折、く、と、い、ふ、と、う、へ、清、秀、あ、り、ま
ま、と、さ、さ、て、大器、量、の、筑前、守、か、く、あ、我、等、と、家、僕、同、様、と

あいらふこの不敵さよとつぶさつその座をへる勝龍寺
あての三宅藤兵衛光秀は食事とてめて申ける大将小勢あて
あての在をこあまう小遠慮あてにたり夜よあてと坂本を
御う然るべきたる當城よの並河八助中澤豊後守以下三百を
うもゆへ御旗御馬印と立置て敵よあてとて大將の籠り
あての体と見をゆへ御跡と慕あてのものもあるまう何もい何
とおのひあてといへ村越三郎堀與次郎進士作左衛門北田帶刀
三宅孫十郎溝尾庄兵衛いづれも至極の御計と申けるまうさ
らば打立あてと六月十三日亥の刻は勝龍寺と出て川端を北は桂川
をうち渡し深草より小栗柄の里よのりて打をけり

重修真書太閤記七編卷之十二終

